

# 新建築

SHINKENCHIKU 2003

6



# 六本木ヒルズ

設計 森ビル 入江三宅設計事務所 山下設計 日建ハウジングシステム ほか  
デザイン Kohn Pedersen Fox Associates PC The Jerde Partnership Conran & Partners ほか  
所在地 東京都港区  
ROPPONGI HILLS  
architects: MORI BUILDING CO., LTD. IRIE MIYAKE ARCHITECTS & ENGINEERS YAMASHITA SEKKEI INC. NIKKEN HOUSING SYSTEM INC. etc.  
designers: KOHN PEDERSEN FOX ASSOCIATES PC THE JERDE PARTNERSHIP CONRAN & PARTNERS etc.





# 東京には これからの都市のモデルとなる責任がある

森稔氏(森ビル社長)に聞く



## 複合・集積化が都市づくりの鍵

日本の再開発の多くは、すでにそこにある都市機能をそのままに、より使いやすくしながら、その表情を新しくするといったものでした。それに対して、六本木ヒルズは新しい街のプロトタイプ提案です。その意味では、再開発というより新開発といった方が正しいかもしれません。ある程度、既存の街の脈絡を断ち切っても、あるコンセプトのもとに、新しい街をつくったということに、みなさん新鮮な感慨を抱かれているようです。

また、従来の再開発はオフィスもしくは住宅を中心とすることが多かったのですが、ここではエンターテインメントな部分、つまりおもてなしの部分を増やしました。つまり商業施設を増やし、かつ美術館、展望台、シネマコンプレックス、さらには野外劇場なども設けたのですが、そうしたことも六本木ヒルズの特徴だと思います。機能を単一とするのではなく複合化し、さらにそれを高い密度で集積しています。このような複合・集積型の都市こそ、これからの高度情報化時代にうまく対応するのではないのでしょうか。

## アークヒルズの経験から

六本木ヒルズは、アークヒルズでの経験を礎としてできていますが、アークヒルズも当初は複合化といった考えがあまり徹底されてはいなかったのです。

住宅、事務所、ホテル、テレビスタジオ、ホールといったそれぞれの機能が、おのれの領域を侵害されないよう互いに牽制し合っているような状態でした。2階のペDESTリアンレベルには広場を設けましたが、何かそれで無理矢理つないでいるような状況でした。私もアークヒルズに住んでいましたが、職住近接といいながら近接している意味をまったく感ぜることができませんでした。それが今のような活気ある広場になったのは、竣工後約10年を経た頃、店舗を外部に開放したオープンカフェスタイルのものに入れ替えたことがきっかけです。そこに住む人や働く人だけのためだけでなく、地域の人も、都市全体に開放するようにしたのです。それによって以前は閑散としていた週末にも賑わう施設へアークヒルズは変貌したのです。

六本木ヒルズは、ここに来なければ得られないワンアンドオンリーの街にしようと考えていました。物販施設にしても飲食施設にしてもサービスにしても、幸いそのコンセプトに合うところが集まってくれましたが、それもアークヒルズの成功によって生まれた、われわれの事業に対する信頼感が土台にあったのだと感じています。

## 都市づくりは映画づくりに似ている

六本木ヒルズの街づくりを通して、都市づくりは映画づくりに似ているように感じました。その意味で、私たちは、ディレクターというよりもプロデューサーといった方がいいかもしれません。優秀な人材を集めて、その組合せを考える。そして夢の実現のためにはお金も集めなくてはなりません。また、出来上がって終わりではなく、その後のマネージメントも必要ですし、次の製作のための人脈づくりも欠かせません。また、夢を描くようなところがないとできないという意味でも、映画に似ているのではないのでしょうか。たとえば商業施設ひとつをとっても、商店街ともショッピングセンターとも、ましてや百貨店とも呼びようがありません。今までにないような施設、でも夢があって、訪れると楽しくなるような施設をつくるというのが私たちの街づくりなのです。

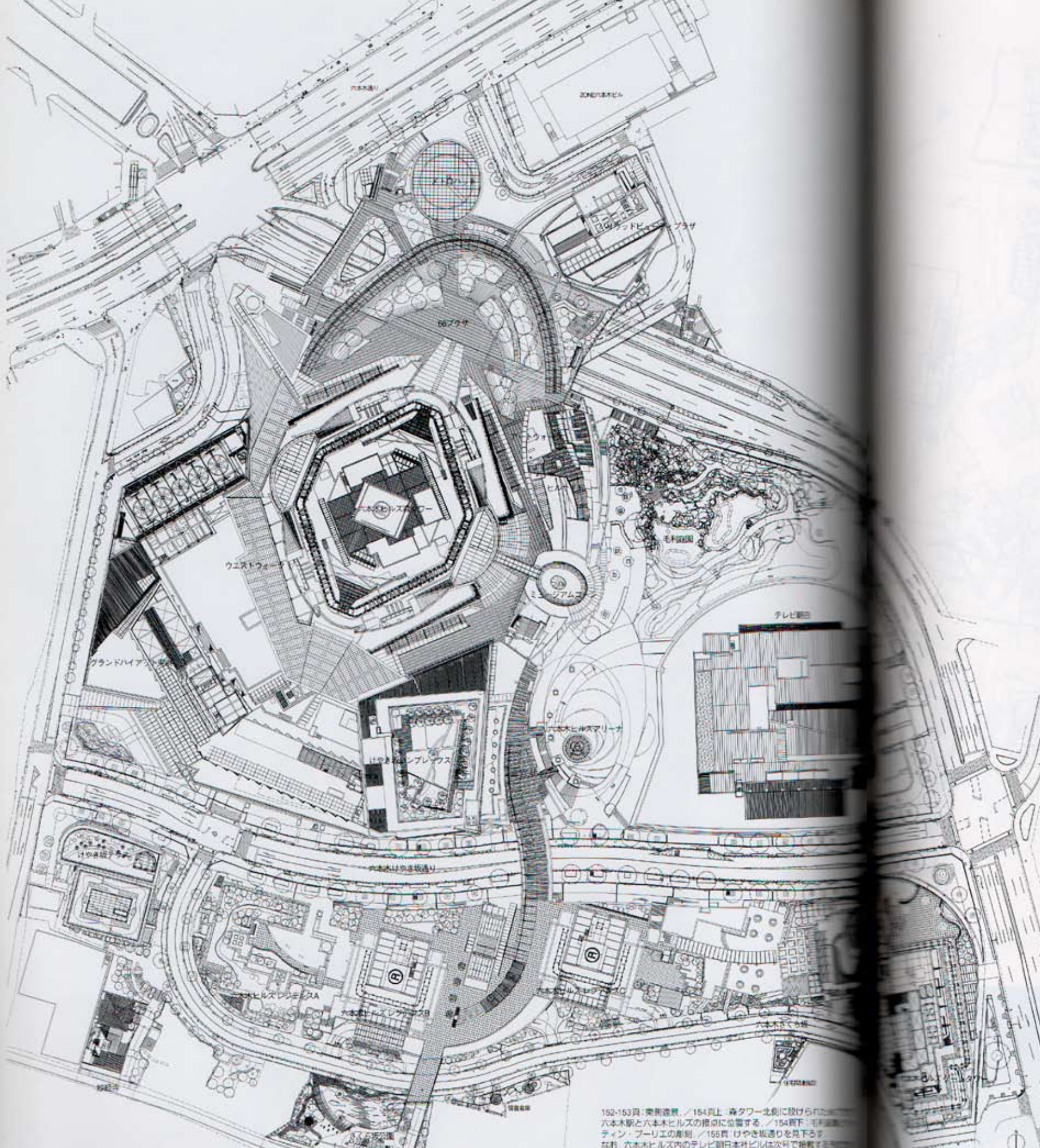
## 都市のプロトタイプをつくる

六本木ヒルズは、これからのモデル都市となり得るだろうと考えています。今後、情報産業、もしくはサービス産業の国際競争に生き抜いていくためには、時間リッチ、つまり時間的に余裕があって、その時間を有効に使うことが必要です。そのためには高層化し、コンパクト化し、機能を集約して、各自が自己実現のチャンスを増やすことが、最終的には日本再生にもつながってくるのではないのでしょうか。

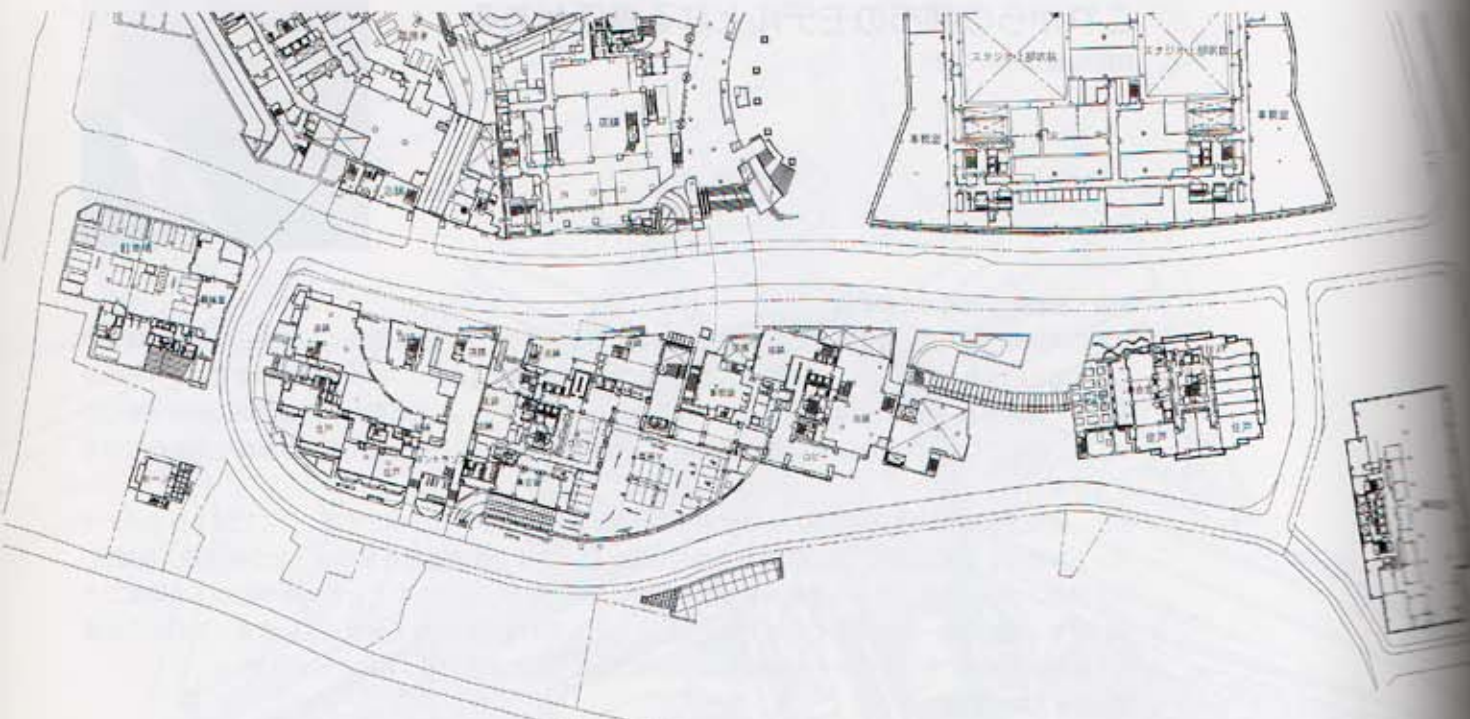
日本は今、経済的に厳しい状況にあるといわれています。しかし、まだまだアジアの諸都市に比べて力があります。ニューヨークでもパリでもロンドンでもない、世界に誇れるアジアの都市のモデルとなる責任が東京にはあるのではないのでしょうか。

現代のあるべき都市の姿に対して、さまざまな議論があります。しかし、百聞は一見にしかず、机上で考えるだけでなく、ここに来て、こういった選択があるんだということを実感して下さい。そして、賛否両論、さまざまな意見を交わしていただけると幸いです。

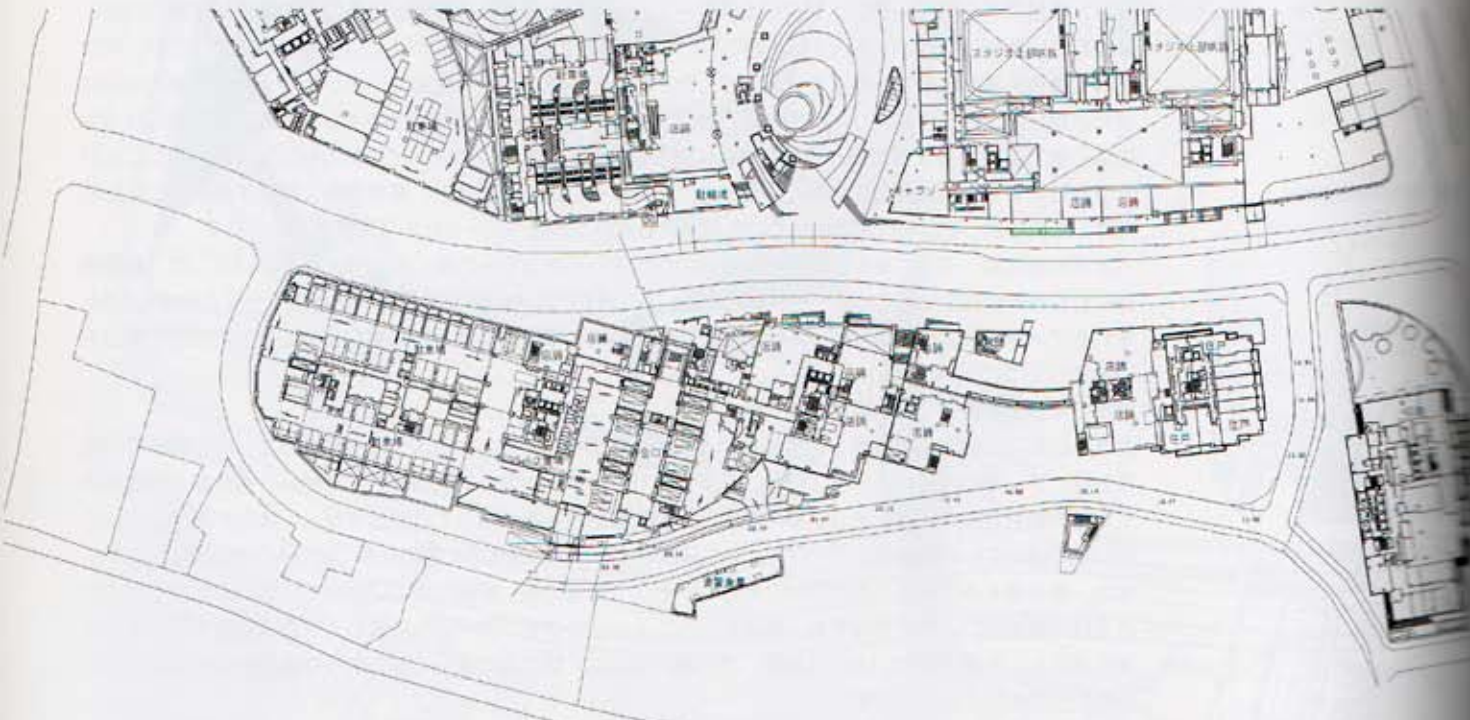
(2003年5月15日 六本木ヒルズ森タワーにて)



152-153頁:東側透視、154頁上:森タワー北側に設けられた六本木駅と六本木ヒルズの接点に位置する、154頁下:毛利園、ティン・プーリ工の彫刻、155頁:けやき坂通りを見下ろす。なお、六本木ヒルズ内のテレビ朝日本ビルは次号で掲載する予定。撮影(特記なき場合):本誌写真部、大沢健一、西川公樹



レベル2平面 (けやき坂コンプレックス1階、レジデンスABC2階、レジデンスD4階、けやき坂テラス地下1階、妙経寺地下1階、ゲートタワー4階)



レベル1平面 (けやき坂コンプレックス地下1階、レジデンスABC1階、レジデンスD3階、ゲートタワー3階、住宅関連施設2階、商業商業1階) 縮尺1/2,000



6階プラザよりハリウッドビューティプラザを見る



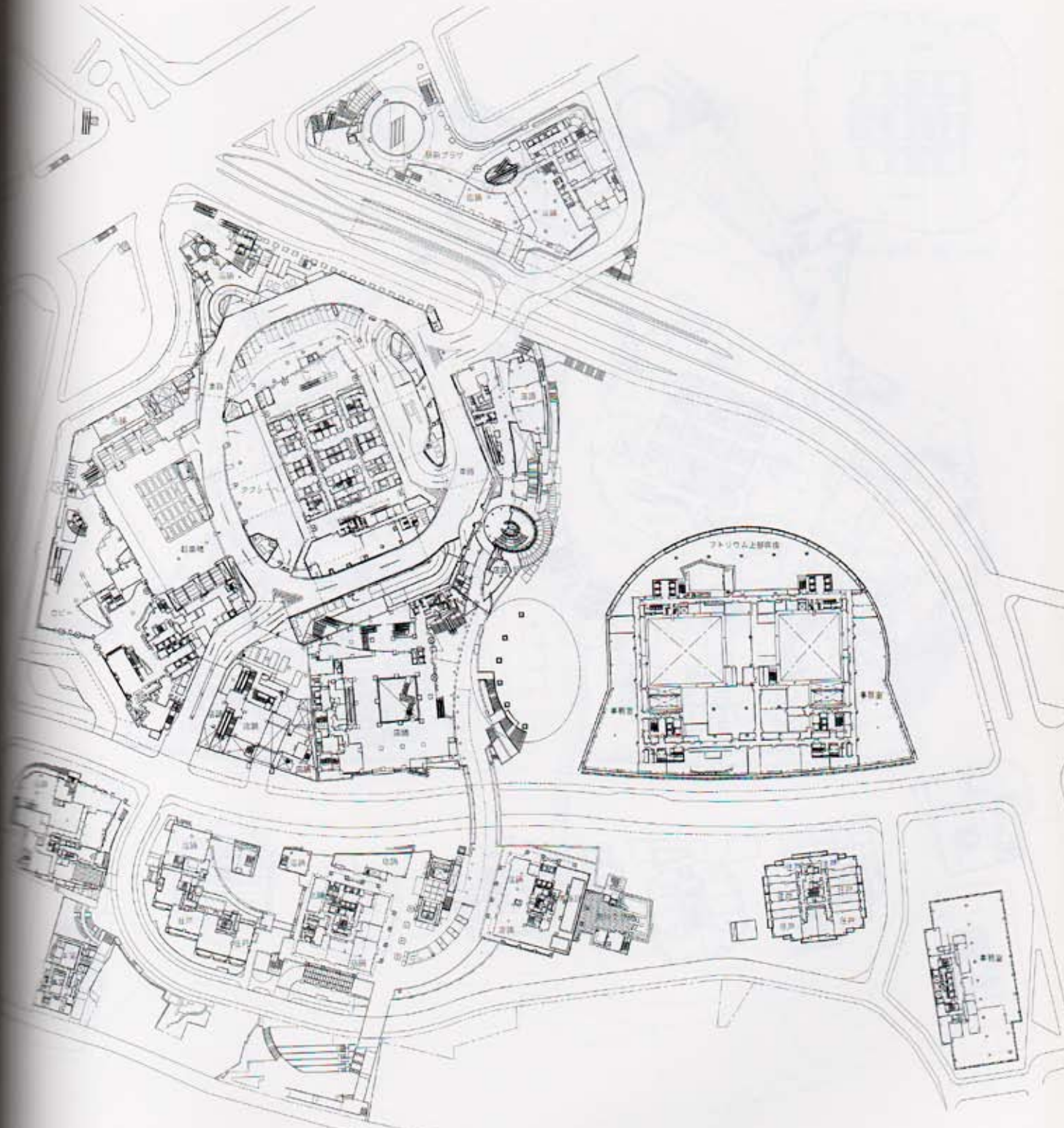
ハリウッドビューティプラザのエントランス



ハリウッドビューティプラザのエントランスロビー



6階プラザよりメトロハットを見る



レベル3平面 (ハリウッドビューティプラザ1階、メトロハット1階、森タワー1階、グランドハイアット東京1階、けやき坂コンプレックス2階、レジデンスABC3階、レジデンスD5階、けやき坂テラス1階、妙経寺1階、ゲートタワー5階)



屋外のイベントに用いられるメトロハットアリーナ



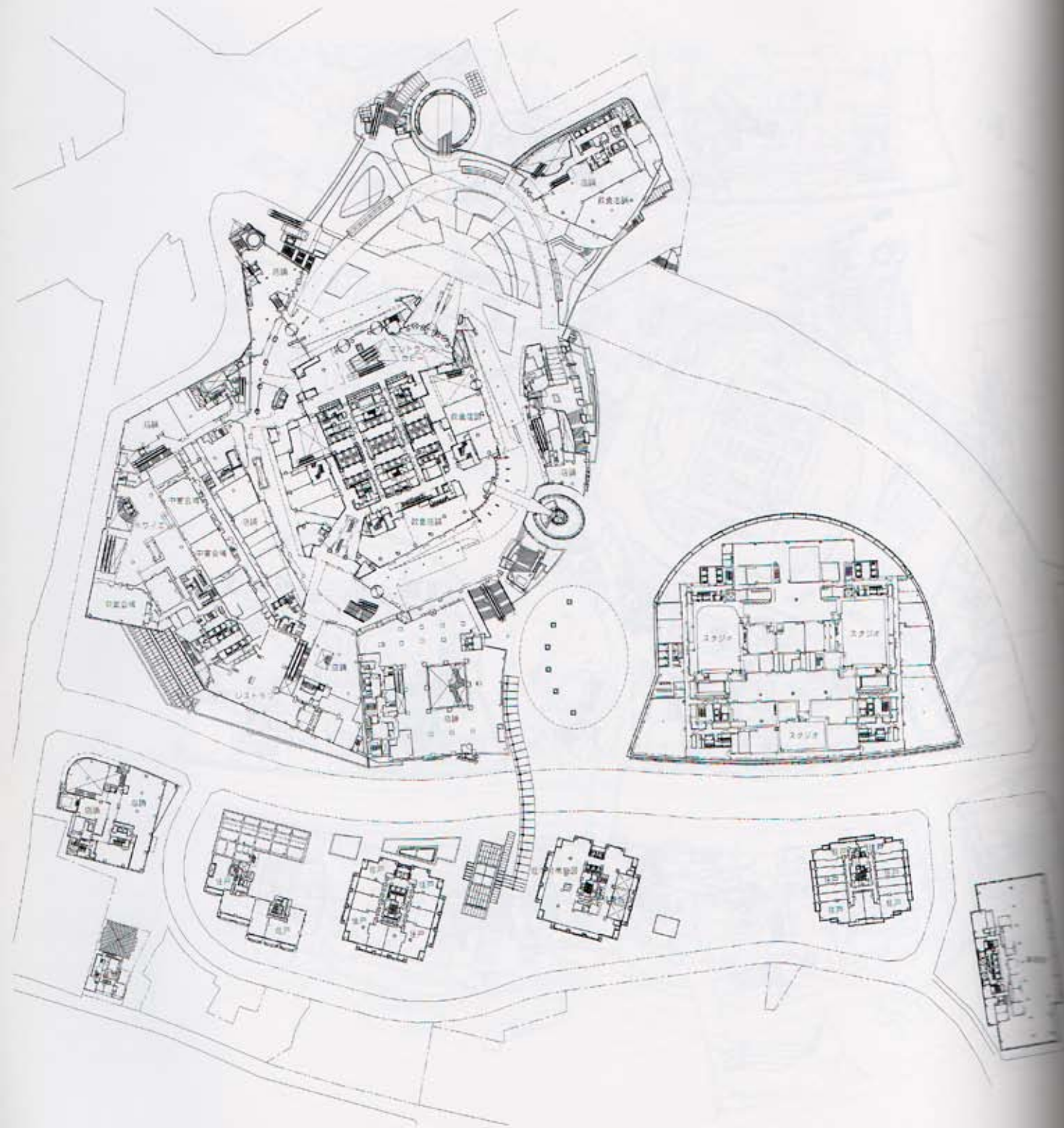
ミュージアムコーン



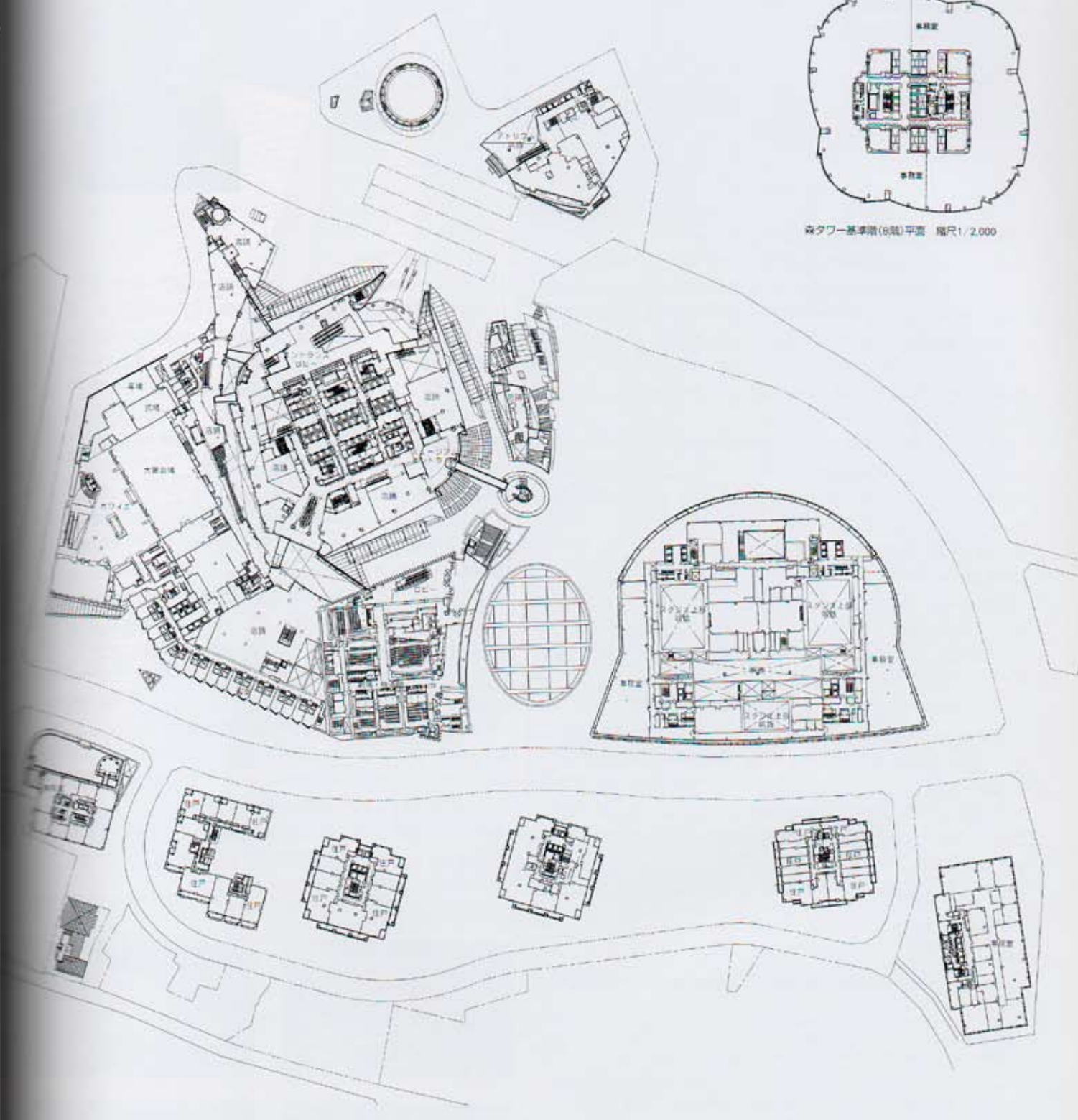
森タワーとけやき坂コンプレックスの間より森アーツセンターへの入口となるミュージアムコーンを見る



けやき坂テラス



レベル4平面 (ハリウッドビューティプラザ2階、メトロハット2階、森タワー2階、グランドハイアット東京2階、けやき坂コンプレックス3階、レジデンスABC4階、レジデンスD6階、けやき坂テラス2階、ゲートタワー6階)



森タワー基準階(6階)平面 縮尺1/2,000

レベル6平面 (森タワー・グランドハイアット東京3階、レジデンスABC5階、レジデンスD7階、けやき坂コンプレックス4階)



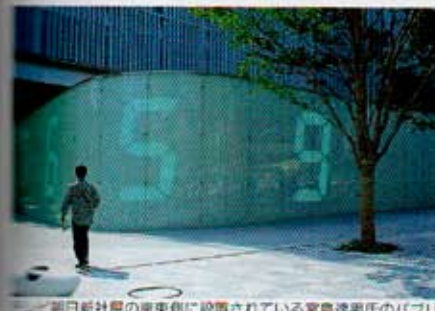
知経寺



六本木ヒルズゲートタワー(左)とレジデンスD(右)



けやき坂通り



元日新社建の南東側に設置されている宮島達男氏のパブリックアート



66広場に設けられたルイーズ・ブルジョア氏のパブリックアート



イザ・ゲンツケン氏のパブリックアート



チェ・ジョンファ(修正化)氏のパブリックアート

## 文化都心をつくる

山本和彦氏（森ビル専務）に聞く



### 17年の歳月をかけて

東京都がこの地区を再開発誘導地区に指定してから完成まで17年がかかりました。1986年、敷地の約1/3を所有しているテレビ朝日がアークヒルズに本社機能を移転したことが、誘導地区指定のきっかけです。周辺との関係や交通基盤の整備も含めて、都なり区が指導すべきだろうということが背景にありました。当社とのかかわりという点から見れば、テレビ朝日がアークヒルズに移ることになった時点でまださかのぼることができます。20年以上ということになります。

工期は3年です。解体も含めてですから、驚異的な数字かもしれません。しかし、それは端から見るときに現れてくる数字であって、そこに住む人は20年近く待たされたのです。着工までにもうすぐ時間が経つのは再開発の宿命です。ですから、足並みがそろったら、1日でも早く完成させたい。それは携わったものすべてに共通する思いでした。

### 文化都心をつくる

この計画が始まった1982年当時、都市に対する考え方は現在とすいぶん違っていったように思います。しかし、当初から街づくりに対するイメージは一貫していました。それにはアークヒルズの再開発が大きく影響していると思います。アークヒルズのときには、完成までに紆余曲折がありました。しかし、アークヒルズが成功したことで、複合開発の有効性が実証されたことが、われわれの自信につながりました。これからの新しいビジネス街は、丸の内に見られるようなオフィスばかりが並ぶようなものではなく、24時間都市、つまり住むところ、ホテル、あるいは文化を楽しむ施設も必要だという確信を得たのです。まして国際的に競争力のある都市に東京になっていくためには、ここに住みたい、ここで働きたい、遊びたいと思われるような環境をつくらなければいけません。

そのような意識のもと、かなり早い段階から「文化都心」というコンセプト

が生まれました。

### コラボレーションについて

世界中から人が集まるような環境、つまり美しく快適で、感性を刺激するような環境をつくるために、優れた建築家をお願いするのは当然です。各層、つまり超高層のオフィスに相応しい建築家は誰か、商業施設に相応しい建築家は誰か、といったように、それぞれの機能に相応しいと思われる建築家の方に参加していただいた結果、たくさんの建築家、デザイナー、アーティストを招くこととなりました。また、そこに住む人が、あるいはそこで働く人が誇りにできるようなビルをつくるためには、選材適所、多くの人材を集める必要があったのです。

このように多くの方々に参加していただいたにもかかわらず、混乱がなかったのは、文化都心という明快な軸があり、かつ再開発の実績が豊富な当社本部の建築家とのコラボレーションもうまくいったからだと思っています。

### 行政そして地権者とのコミュニケーション

文化都心というコンセプトはかなり初期の段階からありましたので、計画の軸がぶれることはありませんでした。また、そのことで行政の人たちの協力をも得られたのではないかと考えています。都市の本来あるべき姿にとって、文化都心という考え方がいかに有効かということも、行政の方々と話をさせていただきました。

けやき坂通りも、港区の協力がなければ実現できませんでしたし、地下鉄と連続するアプローチ通路や広場なども、実際には権利や管理区分が非常に複雑です。そういった問題を解決することができたのも行政が文化都心というコンセプトを理解してくれた結果だと思っています。

500件以上の地権者の方がいらっしゃいましたが、その約8割が再開発後もここに住まわれているのも、地権者の方々が文化都心というコンセプトに共感してくれた結果だと思っています。（2003年5月2日 アークヒルズ森タワーにて）

### 経緯

1986年11月 六本木六丁目地区が東京都から「再開発誘導地区」の指定を受け、再開発が望ましい地区として位置づけられる

1988年 「街づくり懇談会」（5地区）設立

1990年 「街づくり懇談会」設立

1990年12月 「六本木六丁目地区再開発準備組合」設立

懇談会、協議会、準備組合の活動の中で、街づくりのあり方を議論し、再開発実現のための検討、準備と関係権利者の合意形成を進める

1995年 4月 「六本木六丁目第一種市街地再開発事業」都市計画決定

1998年10月 「六本木六丁目市街地再開発組合」設立

12月 設計開始

権利変換計画の策定とさらなる合意形成を進める

1999年 5月 設計完了

10月 権利変換計画策定（10月29日～11月11日）

12月 権利変換計画策定認可申請

2000年 2月 東京都知事より「権利変換計画」認可

4月 森タワー着工

6月 グランドハイアット東京着工、全体名称を「六本木ヒルズ」に決定

9月 レジデンス着工

2001年 5月 けやき坂コンプレックス着工

2003年 3月 竣工

4月 街開き



1986年8月\*



2000年10月\*



2001年4月\*



2001年8月\*



2001年12月\*



2002年4月\*

\*印資料提供：森ビル

## ◆六本木ヒルズ森タワー

設計 森ビル

入江三宅設計事務所

デザイン Kohn Pedersen Fox Associates PC

The Jerde Partnership

Gluckman Mayner Architects

System-O

Conran & Partners

隈研吾建築都市設計事務所

Dewhurst Macfarlane and Partners Inc.

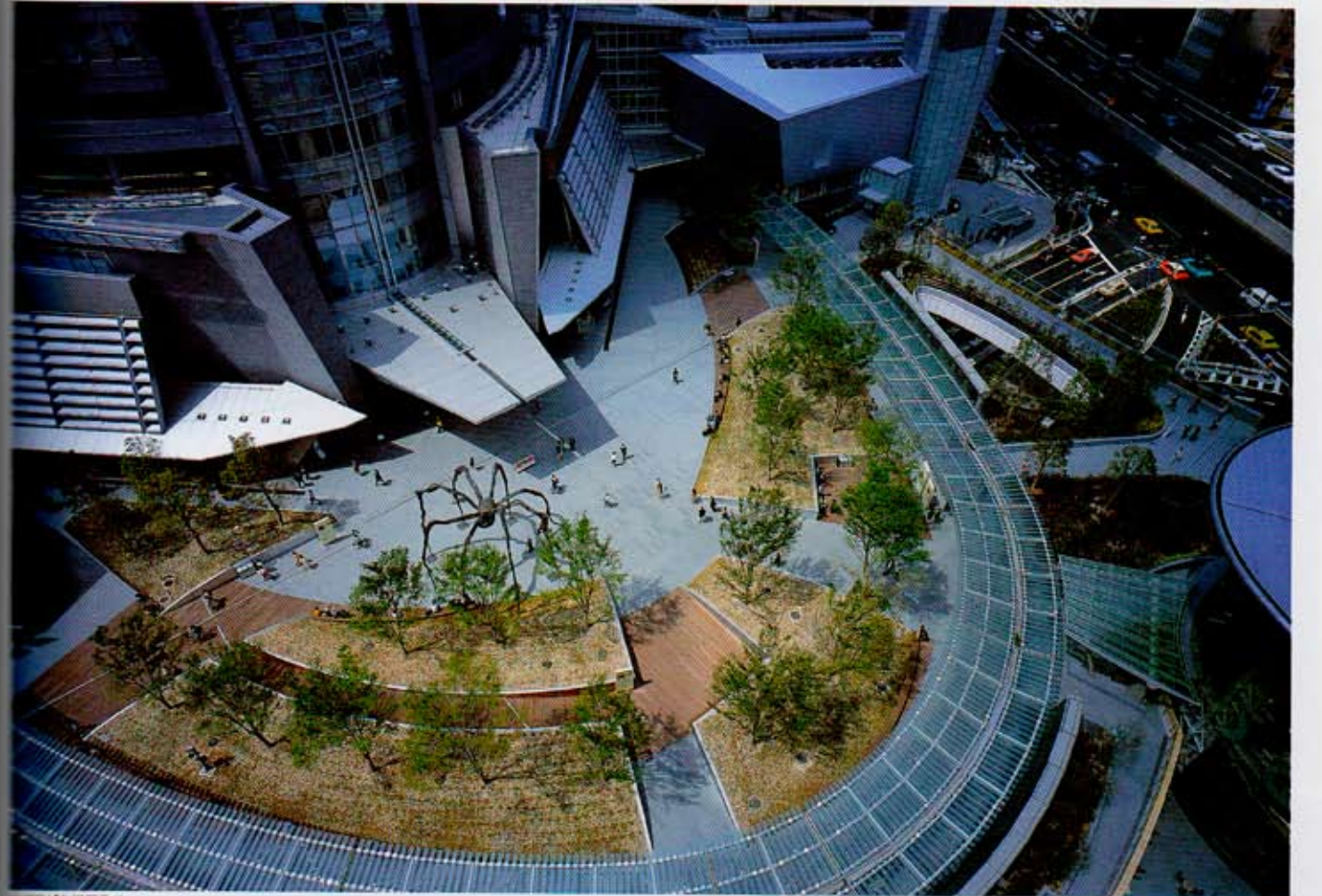
所在地 東京都港区麻布台

〒106-6108 六本木ヒルズ森タワー





二 東西方向より俯瞰する。/163頁:ビルサイドより森タワーを見上げる。/左頁:森タワー(右)とけやき坂コンプレックス(左)の間の広場

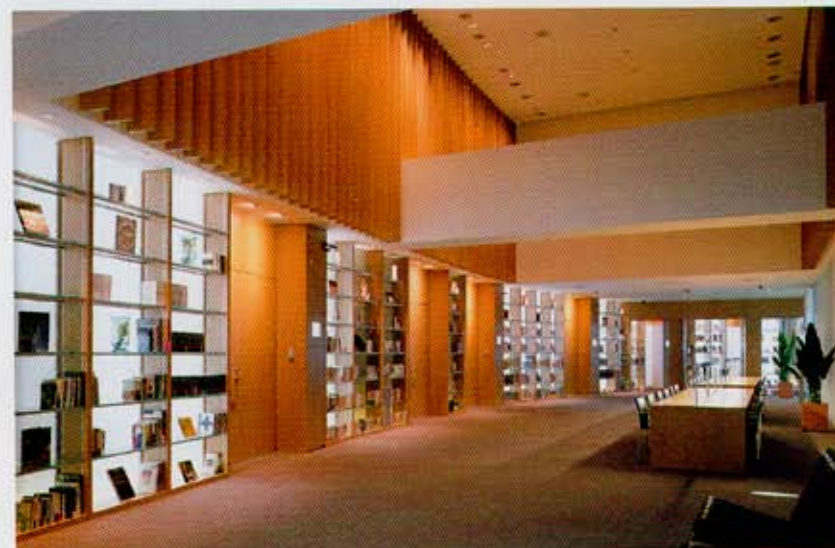


三 フォツゲを見下ろす。





森タワーエントランスロビー



六本木アカデミーヒルズ

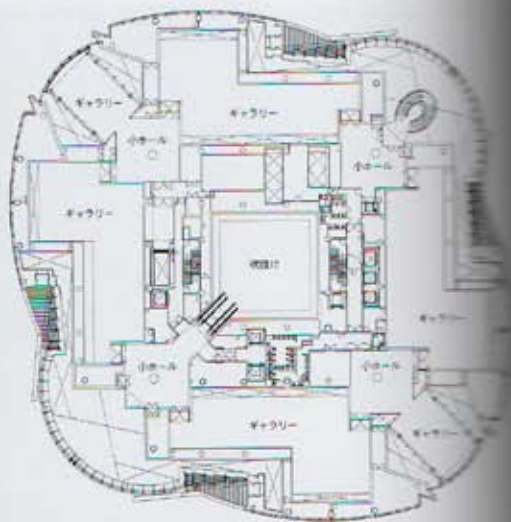
フリーアドレスでユビキタスな超高層プレートへ

超高層ビルの一フロアを建築として解かず、都市とか街と考えたら何が可能か、リアル（建築）テクノロジーの用語でいえばストリート、コミュニケーション（情報）テクノロジーの用語でいえばユビキタス。そのふたつが重なる場をIT技術者と協同で計画した。80m四方という他に例を見ない巨大なフロアプレート上に、小はひとりから大は500人までを収容する多様な空間ユニットを配置するジグソー。コアとファサードの間にループ状通路をまわし、その両側にユニットを配列する陸上トラック型からスタートした。全長は210mのループトラック。もはや都市のスケール、異質なスケールとの遭遇は想像力をかきたてる。ストリートに面した壁をインナーファサードと見なして、ガラス張りになればコアまで外光がとどく。210mのループをあらゆるアクティビティを許容するストリートとして再定義するにはガラス張りにしただけでは足りない。ガラス壁に本や雑誌を並べ、ベンチ、ソファからカフェまでの都市エレメントを配列し、消化管のように膨らませ、立ち

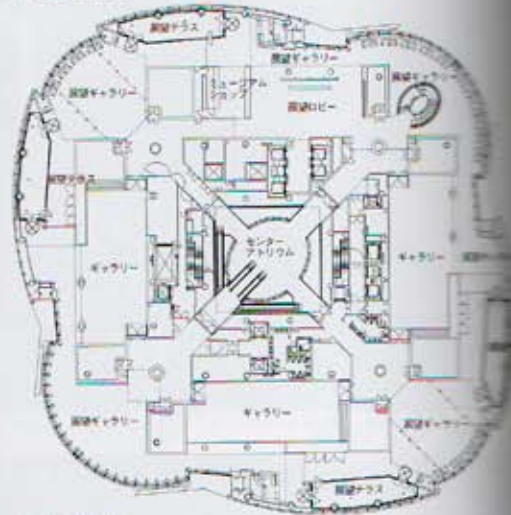
読み、回遊り、おしゃべり、激論まで可能な、寛容なる街路をつくらうと計画は進化した。ソクラテス、プラトンの時代からストリートこそ知のスクランブル・スペースだったことを思い出した。計算したら25,000冊の立派な図書館でもあった。とはいってもストリートを歩く気楽な人びとに、分類どおりに本を返却しろなんていえるはずがない。本にICチップを差し、書棚にアンテナを埋め込むフリーアドレスなライブラリーシステムにすれば、ライブラリーとストリートは両立できる。せんだいメディアテークのコンペのときに話題となったフリーアドレスシステムが、経済産業省のEジャパン構想と連動して世界ではじめて実現する運びとなった。

ミースはユニバーサルという概念を用いて超高層プレートを人間のための自由な空間に変換しようとした。ここではユビキタス・コンピューティングとストリートという道具を用いて、広大で均質なプレートに、寛容とにぎわいとコミュニケーションを導入しようと考えた。

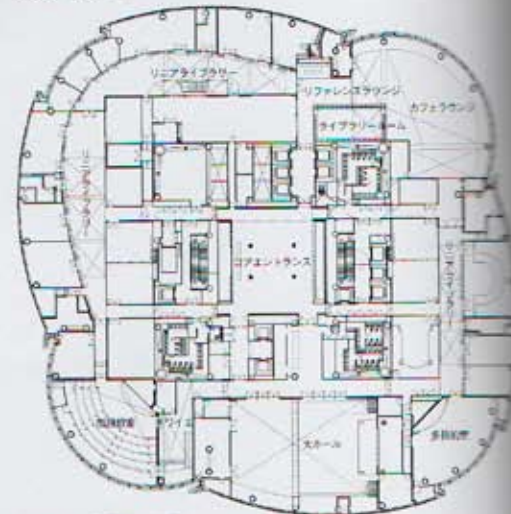
（隈研吾／隈研吾建築都市設計事務所）



森タワー53階平面



森タワー52階平面



森タワー49階平面 縮尺1/1,200



東京シティビュー／右側：ウエストウォーク／168-169頁：毛利庭園越しにビルサイドを見る／170頁：ビルサイドを見下ろす







## アーバニズムとしての建築を構想する

ウィリアム・ベダーセン氏、ユージン・コーン氏に聞く

—六本木という街の中に超高層ビルを計画するうえで、どのようなことを考慮されましたか？

WP 今回の計画では、アメリカやヨーロッパでの高層ビル計画に比べて、1層あたりの床面積が相当大きなオフィスビル計画になっています。それにはいくつかの理由があって、まず、第一に平面計画を効率よく行うことができるということ、また地震に対する考慮をしているということ、その結果おそらく国内でもっとも大きな床面積を有するオフィスビル計画になっています。

EK 森タワーでは、当初は今より小さな平面計画でスタートしていましたが、次第に計画が大きくなって現在のような大規模プロジェクトに発展してきました。おそらく、神戸での地震の影響が大きかったのではないのでしょうか。まず、そういった大地震にも耐える高層ビルの平面計画を考えたらうえて、経済的にも有効な床面積を確保することができるものへと発展してきたのだと思います。日本でオフィスビルを計画する上で、そのような条件を有効に使うことができるように発展させることができたのだと思います。

WP そこで重要なことは、平面的な寸法とビル全体の高さとの関係が問題となってきます。建築的な視点でいうと、垂直性を強調した、流れるような形態をつくり出そうと思ったのです。その結果、電波障害などにも柔軟に対応できる曲面をもった建築となりました。

EK 東京では、四角い平面をもった高層ビルが支配的で、その結果、テレビ電波などは乱反射を起こしてゴーストなどを発生しているわけです。また、形態の流動性を強調するためには、建築全体にメタリックな表情をもたせたいと思ったのですが、建築の表面を金属で覆うことは、こうした問題にとっては不利になります。そこでコンクリートに塗装をして解決したのですが、かえって力強い表情になったと思います。

WP 加えていえば、横文彦さんが設計したテレビ朝日本社ビルの形態にも影響を受けているといえます。この建築のフロントファサードは、曲面になっています。その曲面に呼応するようなデザインを取り入れようと思いました。私たちにとっては、そうした姿勢は非常に自然なもので、お互いにより関係性をもった建築として成立しているのではないかと考えています。そして、東京という都市の周辺環境との関係性でいえば、敷地の周囲に存在する、それぞれの特色や特性を反映させることが重要であると思いました。東西南北に対して、大変特徴的な方向性を見出すことができましたし、高層部分には四角い平面をもったミュージアムを計画することになっていたのも、それも意識して建築のオリエンテーションを決定しました。

高層ビルを計画するうえで、もっとも難しいことのひとつに、その建築が特定の周辺環境の中で受け入れられるような形態をもたなければならないということが挙げられるでしょう。外国人である私たちにとって、日本で計画する高層建築を、どのような形態にして周辺環境になじむようにするかを考えることは、非常に難しい課題でした。日本に住む人たちに対して、この建築が日本的であるものに映るように、日本での特性を生かした建築となるように計画を進めることは、とても重要な問題であったのです。形態的には、多層構造をもった形態をつくり出すというのが、私たちの意識の中にありました。日本の伝統工芸でもある、武士が装っていた甲冑のもつ多層構造に大きく影響されているといえるでしょう。いくつものプレートが体を覆うように重ねられている甲冑フォルムを、この建築で取り入れようとしたのです。



ウィリアム・ベダーセン氏(左)とユージン・コーン氏(右)。

—日本の伝統的な要素を取り入れようとしたのですか？

WP 伝統的な要素の翻訳を試みようとしたわけですが、私たちは、個性のないインターナショナルスタイルの建築をつくることはしないように心がけています。東京という都市に帰属する建築として、また日本の風土に対してもなじみのある建築にしたいと思っていました。また、森ミュージアムやアカデミーといった施設を高層部分に握し、高層建築にこうした要素を内包するということが大変ユニークな特性であると感じました。また、この建築には相当量の一般市民向けの空間が用意されています。それは、建築の断面計画においても大きな意味をもっています。9月11日の悲劇以降、高層建築をどのように建てるかということは大変大きな問題になっています。それに対して、六本木ヒルズは多くの回答を提供していると思います。文化的な部分、商業的な部分、創造性を刺激するような場所や生活するための場所が一体となった都市施設として存在し、その中の高層建築が単にオフィスビルとして存在するだけでなく、さまざまな複合要素を兼ね備えたシンボルとして地域を構成するという点について、大変重要な意味があるのだと思っています。

EK ニューヨークで高層建築をデザインしようとする、その建築はマンハッタンのグリッドシステムのもつ制約を大きく受けしてしまうことになります。敷地の条件として、こういった要件が決定的な要素となってしまいます。それがニューヨークという都市における特異性にもなるわけですが、東京においては、空間のもつ自由度をさらに広げることができるようにも思います。美術館を冠にいただいた、さまざまな建築が合体した複合施設としての存在は、マンハッタンのようなところでは起こり得ないわけです。

—横文彦氏やジョン・ジャーディ氏がデザインのパートナーとして参加されていましたが、建築家との共同作業は成功したとお考えですか？

WP 私は個人的には、アーバニズムとして今回のプロジェクトをとらえた場合、大変成功したのではないかと考えています。これは現代の都市における典型にもなり得ると思うのです。たくさんものものが同時多発的に隣接していることの面白さです。私たち自身がつくり出したものであるにもかかわらず、そうした繁華に落ちた隣接の関係をつくり出すことができました。オフィスタワーとは別に、ホテル様のデザインもしたのですが、こちらはオフィスタワーのもつメタリックで曲面を多用した表情とは異なり、内部空間も柔らかいデザインを施し、暖かい質感の石材を外装に使っています。また、角張った平面計画もオフィスタワーとは異なっています。私たちはこの計画を進めるうえで、こうしたまったく異なった特徴をもつ建築同士を隣り合わせ、仮想的な構成になるように心がけました。ジャーディ氏のデザインした商業施設も、私たちのデザインと隣り合うことで強烈な印象を与えるものになっています。ニューヨークのロックフェラーセンターの場合、ひとりの建築家が非常に統一感のある都市計画を行っていますし、ロンドンのカナリーワフの場合は、複数の建築家がそれぞれ建築を設計していますが、個々の規模が大きく、また、協調したエネルギーの集積というものが感じられませんが、デザインの言葉遣いのようなものの統一性も見られません。ここ、六本木ヒルズの計画では、私自身、デザインの言葉遣いの統一性を強く意識したつもりです。こうした意識を森ビル側も求めていたのではないかと考えています。

(2003年4月23日 六本木ヒルズ森タワーにて)